

# お寺の社会性

## — 生奥坊主のつごやき —

### 十二

## 竹中尚文

### 1. 病院長の怒り

先日、知り合いの病院長が怒っていた。患者さんが亡くなった。身寄りもなく、生活保護を受給していた。市の委託を受けた業者が遺体を引き取りに来た。誰も送る人がいないので、手の空いている病院スタッフがお別れをしようと言う話になった。その旨を市に問い合わせたら、お骨になったら連絡するので引き取りに来てほしいと言われたそうである。

私も同じような怒りを感じたことがある。今年の冬、門徒の方が亡くなった。その門徒の方も生活保護

受給者であった。私は生活保護受給者の方からは御布施をいただかない。公金による御布施はいただけない。だから、ボランティアでお経をあげるつもりでお葬式に出掛けた。しかし、それも認められなくなった。市に委託された業者が遺体を引き取りに来る。それには誰も付き添えない。そして、お骨になったら連絡をするので受け取りに来ていというのである。近所のおばさんが、「私らは、ゴミか？これって、ゴミと同じ扱いじゃない！」と言って泣いた。病院長の怒りもこの点にある。

## 2. 死んだら終わり

ここ近年、生活保護受給者への風当たりは厳しい。また、貧困についても、何も知ろうともしないで自己責任で片付けてしまう。

仏の目から見れば、人間の歩みは氷の上を歩くようなものじゃないかと思う。たまたま厚い氷の上を歩いているが、知らずに薄氷を歩くこともある。また、踏み抜いて冷水に溺れることもある。だから、私は貧困を自己責任という言葉でくくることに与しない

生活保護受給者は死んでからもペナルティーを受けなければならないのか。生活保護受給者は人として送られてはならないのか。葬儀は贅沢なのだろうか。どうしてこんなことになったのか。

「私らは、ゴミか？」という発言があった。人間は死んだら、ゴミだと考える人もいるらしい。人間の死に、意味を考えない人がいる。他の言い方をしてみると、「人間、死んだらおわり」ということでもある。

今、無宗教という言葉と共にこのような考えは広まっている。

無宗教を標榜する人は、お骨を拾わない。お骨を拾うと宗教行為が始まるのだから。無宗教という言葉は、死者と生きる者の断絶を意味している。

生活保護受給者の葬儀を認めないのは、私たちの社会の意識の変化によるものである。

## 3. 仏と私はつながっている

人間の考えや感じ方は、状況によって変わることがある。仏は私と一緒にいると言っても、見えるのか？触れられるのか？と言われそうだ。仏の存在についての水掛け論をするつもりはない。

私は、人の臨終に呼ばれる。そこで、いわゆる枕経を上げるのである。その時、「人間は死んだら終わり」とは誰もが思っていない。誰もとは言い過ぎかもしれないが、ほとんどの人はそんな風に思っていない。この時、人は亡くなった方と縁が切れ

たとは思わない。死んでも繋がっているのである。

#### 4. 念仏の力

長野さん夫婦は駆け落ちをしてきた。今では駆け落ちなんていう結婚形態を聞くことは少ない。ちょっと昔のことである。長野さんは、私たちの寺の門徒になった。夫婦で一生懸命に働いて家も建てた。夫、次いで妻と相次いで亡くなった。若くして亡くなったとは言え、息子は成人していた。一度は会社勤めをしていたが、母親の亡くなった時には会社を辞めて家に居たようだった。その後、彼はアルバイトなどで生活をしている様子だった。祥月命日のお参りだといっても、仕事で不在だからと断られることが多かった。その内、だんだん自宅にすることが多くなった。身体の調子が悪いので、あまり仕事に行けないと言う。それと共に、経済状態が悪化しているように伺えた。時々、食べ物を届けるようになった。

久しぶりに彼の近所を通りかかったので、訪ねてみた。げっそり痩せた彼がふらふらと出てきた。「どうした？どこが悪いのか？」と尋ねた。食べ物がないと答えた。食べていないだけではなさそうだった。彼の言動が少し、気になった。ツテを頼って彼を精神科の病院に連れて行った。食事をしていない彼の健康状態を併せて診てほしかった。診断の結果、彼を入院させた方がいいと言われた。

私は、入院をすれば食事もちょうんととれるし栄養状態も改善すると思った。彼は入院をしたくないと答えた。彼の病気が予想外に進んでいることに気が付いた。それから「入院しろよ！」「いやだ！」というやり取りがあった。その間も彼の病状は目に見えて悪化した。彼が「いやだ！いやだ！」と叫ぶように言っているときに、私は「誰があんたの親を送ったのだ。親の言っていることだと思って聞け！」と叫んだ。彼は急におとなしくなった。翌日、彼は

入院した。一ヶ月後には、彼は血色もよくなって退院した。

こう言うと、彼が入院をしたのは私の言葉によるように聞こえるが、そうではない。私の言葉で、彼は母親の思いを思い出したのだろう。入院してから分かったのだが、彼の母親は亡くなる前に彼を病院に連れて行き治療を受けさせていたのだ。母親は、彼の病気のことやその先のことを心配しながら亡くなっていった。その思いを彼は知っていたのだ。だから、「親の言っていることだと思って聞け！」という言葉に反応したのだと思う。彼は、病気の中でも亡くなった母親の思いとつながっていたのだと思う。

私は彼との出逢いの中で、いろいろな事を学んだ。病気になることの辛さ。病気は人間の誰もがなる可能性がある。また、その中で彼の人間性を保とうとする力、それは十分に尊敬に値する彼の力である。それは仏とつながっていることに支えられている力であるかもしれない。

坊主の言い方ではあるが、仏と人間はつながっている。仏を思う、すなわち念仏である、その念仏には力がある。

## 5. 仏によって

この夏に富山さんが亡くなった。数年前に富山さんのお兄さんが亡くなった。その七日参りで聞いた話しである。彼はお経と法話の後、お茶を飲みながら、唐突に語り出した。

富山さんは40年ほど前にお嬢さんを交通事故で亡くしている。そして20年ほど前に経営していた会社が倒産した。その時の話しである。

あの日、富山さんは金策に走り回ったそうである。どうしてもお金が作れなかった。どうしようもないと思った。このまま命を絶つしかないと思ったそうである。最後にお嬢さんの亡くなった場所に行こうと思ったそうだ。できれば、そこで死にたいと思ったそうだ。

その場所に自動車を停めて、時間が止まったような時間が流れた。こ

のままここで死んだら、娘に会わず顔がないと思ったそう。それから、彼は山あり谷あり谷ありの人生を送って、この夏に亡くなった。決して楽な人生ではなかったが、いい人生を送った。一生懸命に生きた。

あの時、お嬢さんのことを思わなければ、富山さんのこの人生はなかったかもしれない。あの時だけではない、富山さんは、ずっとお嬢さんのことを思いながら人生を送ったような気がする。

そして、今年の暑い夏、富山さんはやっとお嬢さんと出会った。

人の死に出会うことによって、私の人生に意味を持つのである。

